

日本語授業への試み —映像教材およびアニメの使用—

呉承和

一、はじめに

筆者は非常勤として大学、職業高等学校、日本語学習塾、また一般の高校でも日本語を教えている。学習者層の幅は広く、彼らが求めるもの、すなわち学習動機やニーズはそれぞれ異なる。そのため、「どう授業を進めればよいのか、またどうやって日本語に対する学習意欲を維持させていけばよいのか」私は常に考えている。

外国語を勉強する際、語彙や文型・表現の学習は不可欠であり、大変重要である。また目標言語の国での生活習慣など、文化面を視野に入れた学習方法も大切である。DVD 映像教材やアニメなどの視覚教材を使用することによって、日本人及び日本文化への理解が可能になり、今まで苦勞して身につけた単語やさまざまな文型も意味を成す。また、実際のコミュニケーション時にも使われていることを実感でき、同時に学習意欲の維持に対しても十分に役立つと考えられる。

二、使用した DVD 映像教材とアニメについて

1、『エリンが挑戦！ にほんごできます』

国際交流基金会によって編集された DVD 教材である。教科書は全部で 3 冊(1 巻と 2 巻は DVD 各 1 枚、3 巻は 2 枚ついている)あり、合わせて 25 課になる。この教材を選んだ主な理由は二つある。一つは日本国外の若い学習者を主な対象として作られた教材であること、もう一つは豊富な映像教材が含まれ、ことばと表現・文型だけではなく、文化の勉強もできることの二点である¹。

2、アニメの「あたしんち」

内容は高校生「みかん」の家族を中心に繰り広げられる日常的な出来事である。日本人の日常生活の様子や親子の絆などを描写したアニメであり、台湾と日本の文化・習慣上での共通点もあるため、台湾でも多くの人に受け入れられているアニメである。

三、授業の進め方

日本語を第二外国語として学ぶ学生(高校生および大学生)を対象とする授業

¹ 2008 年 2 月末から 6 月末までの 4 ヶ月に渡り、台北市市立中山女子高校と台北市市立西松高校の日本語授業に対して『エリンが挑戦！ にほんごができます』を導入し、試案を行った。DVD を見せてから筆者が作成したプリントに合わせて各課の場面に関連することばなどを説明しながら、プリントに書いてあるさまざまなタスクなどをさせる。

であるため、急にアニメを教材として使い、授業をすればあまり学習効果を期待できない可能性がある。そのため、前期は『エリンが挑戦！ にほんごできます。』という映像教材のみ使用する。一学期にわたって基本的な語彙や文法などを身につけさせ、後期に入ってから『エリンが挑戦！ にほんごできます。』だけではなく、アニメの「あたしんち」も副教材として授業に導入し始めた。

まずは普段使用している教科書の各課の内容に沿って授業をする。各課の学習が終わった後、『エリンが挑戦！ にほんごできます。』の DVD を見せる。DVD には会話実例を示すために演じられたスキットのほか、日本の文化、習慣や日本に関するさまざまなものを紹介するために作られた映像も入っている。一部分の内容には日本語の字幕もついているが、字幕があっても内容理解に繋がるとは限らないため、基本的に中国語で内容の補足説明を加えながら授業を進めていく。

また、授業で使うアニメの「あたしんち」はパソコンでテレビの放送内容を録画し、中国語の字幕も付いているものである。台湾で販売されている「あたしんち」の DVD は全て中国語または台湾語の吹き替えバージョンになっているため、日本語学習の教材として使うことができないからである。学習者に見せる前に、アニメの内容に基づいて作成したプリントを配布する。プリントには「内容の SCRIPT」が含まれている。一回目の視聴はアニメを見せながら、聞き取れた単語やセリフを SCRIPT にある空欄に入れさせる。学生のレベルを考慮し、また挫折感を味わわせないために、入れさせるのはほとんど「寒い」や「これ、それ」などのような既習単語または基礎的な語彙である。なお、二回目の視聴では、その内容やセリフの意味をより詳しく説明し、同時に答え合わせもする。

四、結論と問題点

後期最後の授業の際には授業方法についての調査も行う。調査結果により、『エリンが挑戦！ にほんごできます。』やアニメの「あたしんち」のような適切な映像教材を使い、また教師が学習プリントなどを工夫すれば、さらによりよい学習の雰囲気を作ることができるだけでなく、日本という国をより理解し、ひいては日本語に対する興味をより高めることができることが明らかになった。

今回はなるべく学習上の困難を避けるため、アニメを見ながら、聞き取った単語やセリフを空欄に入れさせる聴解練習のみにとどめている。しかし、アニメを日本語学習素材として活用することができる範囲はこれだけではないと考えられる。新たな使い道を模索していくことが今後の課題である。また、このような授業の進め方は実際に日本語能力の向上に繋がっているか、工夫して検証する必要がある。

